

元寇防塁調査のあらまし

元寇防塁は1913年（大正2年）史蹟現地講演会のさい今津の2カ所がはじめて発掘されました。元寇防塁の名称は、このとき中山平次郎博士によって名づけられました。大正9年に西新地区、大正13年に西新小学校横が発掘されています。

昭和44年3月九州大学の先生方を中心に生の松原地区の総合的な調査を行いました。

昭和44年8～9月に今津地区、46年に西新地区を調査し、それぞれ保存工事を行ったあとと現地で見学できるようになりました。



生の松原地区



西新地区



今津地区



休憩展示施設（今津地区）

元寇防塁の構造ときずき方

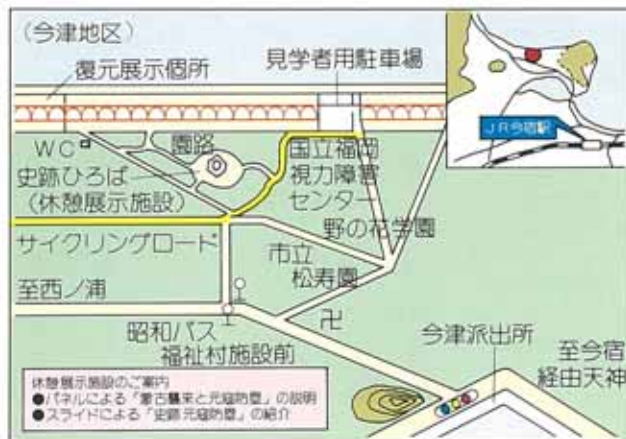
生の松原地区は石を積みあげた幅が1.5mと狭いのですが、粘土を裏ごめしています。修理のあとに残っています。

今津地区は下の幅が3m、上が2m、高さ3mと台形の形で最も保存が良いところです。花崗岩と玄武岩を交互にきざいたところがありますので、その長さで割りあてた所領の大きさを知ることができます。きざいた石の種類によって、防塁の断面の構造がちがうことがわかっています。

西新地区は砂丘の上に粘土をしいて基盤を安定させ、その上に石を積みあげています。下の幅は3.4mあります。

このように防塁の構造やきざき方が地区により異なります。石は砂丘の両側の半島や海岸から運んでいます。

案内図



史跡 元寇防塁



元寇防塁は国指定の史跡です

昭和6年3月に今津地区、今宿地区（横浜と青木の2カ所）、生の松原地区、姪浜地区（向浜と脇の2カ所）、西新地区（藤崎・西新・地行の3カ所）、箱崎地区（箱崎地蔵松原）の10カ所が国の史跡に指定されそれぞれ大切に保存整備されています。

蒙古襲来のあらまし

1266年 蒙古が使者を日本へ送る

蒙古は西ヨーロッパから東アジアにまたがる世界帝国をきざいでいますが、1231年以来高麗を攻め、1266年からたびたび日本へ使者を送っています。これに対し鎌倉幕府は一度も返書を与えず、1271年異国警固のため九州に所領をもつ東国の御家人に対し九州に向うように命じ蒙古の襲来にそなえています。

●蒙古の国書

フビライが日本国王にあてた国書。通好のため使者の派遣を要求し、もしなければ武力を用いるのもやむを得ないとしている。



1274年(文永11年) 文永の役

1274年三別抄を平定した元は高麗に船をつくる命令をだし、1274年10月軍船900艘・兵員3万余が合浦を出発し、対馬・巻岐を攻め博多湾に侵入してきました。

10月20日今津や百道(西新)などから上陸した蒙古軍は鹿原山に陣をかまえ、鹿原・鳥飼・赤坂・箱崎などではげしい戦いになりました。なれない集団戦法や毒矢・鉄砲という新兵器などに日本は苦戦し、水城まで退き、博多のまちは大きな被害を受けました。

●蒙古軍の陣営

文永の役のとき鹿原に陣をかまえた蒙古軍の様子を描いている。「竹崎季長絵詞」には、いろいろの旗をたてならべ、乱鉦を打ちながら、ひしめき合っていたと記している。



1275年 蒙古の使者を斬る

文永の役のあと日本へ派遣された蒙古の使者は鎌倉へ送られ、竈口で首をはねられました。幕府は対決の姿勢をしめし、蒙古が再び日本を攻めてくるのはさけられなくなりました。

1275年12月には、日本から高麗を攻める異国征伐(高麗進攻)の企てが出され、参加する者の兵員・武具などを報告するように命じています。

博多湾と元寇防壁の位置図



1276年(建治2年) 博多湾岸に石築地(元寇防壁)をきざく

鎌倉幕府は1276年に博多湾の海岸線に石築地をきざくよう命じています。これは蒙古の再度の来襲にそなえて、海岸で上陸を防ごうというもので、これを元寇防壁とよんでいます。はじめは高麗進攻の者は石築地役をのぞいています。

元寇防壁は今津から香椎までのおよそ20kmの長さを、九州の九か国が分担してきづいています。今津地区は日向と大隅、今宿地区は豊前、生の松原地区は肥後、姪浜地区は肥前、博多の中心部は筑前と筑後、箱崎地区は薩摩、香椎地区は豊後の国となっており、一国あたり1.5~3kmの長さを受けもってきづいています。

石築地役は所領一段につき一寸の長さをきざくという基準で、3月から8月の6か月間できざくようになっています。

●石築地役催促状

肥前国の守護から肥前国深江村(長崎県南高来郡深江村)の地頭安富氏にあてた石築地(元寇防壁)の催促状で、石築地役の最初の史料。

国中平均に課し、人夫を連れて博多津に向い、築造工事にあたるように命じている。肥前国の守護は、異国警固番役を指揮した大宰小式部武敏経資である。



1276年 異国警固番役をあらためる

幕府は1275年に異国警固番役をととのえ、1年のうち3か月を九州の各国が交代して勤めるように決めました。

元寇防壁をきざいたあとは、各国が分担した地区の番役を勤めるようにあらためました。1304年以降は国ごとに1年間を通じて警固するように定めています。

●竹崎季長の出陣

弘安の役のとき肥後国が警固する生の松原地区の元寇防壁の前を踏み、出陣するようすを描いている。元寇防壁をきざいたあと、その上に旗差し物を立て鎧兜に身をがためて警固にあたったようすがわかる。



1281年(弘安4年) 弘安の役

1279年南宋を滅ぼした元は1281年再び日本遠征に向いました。東路軍(元・高麗)と江南軍(元・南宋)合わせて軍船4,500艘・兵員14万余という大軍です。

さきに出発した東路軍は対馬・巻岐を攻め博多湾に侵入してきましたが、元寇防壁のため上陸できず、江南軍と合流するため巻岐に退き、再び博多湾をめざしましたが、閏7月1日の暴風雨のため長崎県壱島沖でほとんどの船が沈み、日本は難をのがれることができました。

●壱島の掃討戦に向う小船

閏7月1日暴風雨で沈んだ元軍に対し、7月5日大風後の壱島の掃討戦に向うようすを描いている。竹崎季長はこのとき自分の船をまぢきれば、他の船に乗りこんで戦功をあげている。



その後の情勢

元は弘安の役のアとも日本遠征計画をやめていないため、幕府は警固体制をゆるめることができず、御家人に長い間重い負担を課すことになり、1333年鎌倉幕府は滅びました。

室町時代になっても異国警固や防壁の修理がつづけられています。1368年元が滅び、元寇防壁はその後しだいに砂に埋っていったようです。